

<学会レポート>

第14回医療の質・安全学会学術集会

2019年11月29日～30日 於 国立京都国際会館

旗手 俊彦（札幌医科大学）

本年度第14回学術集会のテーマは、「レジリエンスの探求～つながり、共創、イノベーション」であった。これまでの学術集会のテーマは、医療事故をどのように防止するかという問題意識の下に設定されて来た。これは、安全科学の分野では、safety 1 と呼ばれるアプローチである。このアプローチでは、組織の脆弱性の発見と脆弱性補強の様々な方法が探求されることになる。医療安全の分野では、インシデントレポートシステムによる当該医療機関のリスク要因の顕在化とリスク低減に向けての院内チェック体制の改善などが探られてきた。これに対して、レジリエンス・エンジニアリングとは、時々刻々と変化する状況や環境内において、チームがどのようにそのような状況・環境にうまく対応しているのかという成功体験に目を向け、組織としての弾力性に注目する理論・方法論である。このような組織の強みに基づいた安全理論は、safety2 と呼ばれる。

第14回学術集会では、レジリエンス・エンジニアリングの第一人者である、Erik Hollnagel 教授をデンマークから招聘し特別講演を開催した。また、具体的なレジリエンス・エンジニアリングの試みとして、看護記録のイノベーションによるチーム医療の良質化・効率化に関するシンポジウムが企画された他、医療者の働き方改革による医療の質向上と持続可能性に関するセッションも開催された。また、上述メインテーマに関するセッションとは別に、今回は、臨床研究に関するシンポジウムとセミナーも開催されたことが特筆すべき取組であった。今日、専門医資格の取得・更新に際しては、医療倫理と医療安全の単位取得が必須とされており、昨年度から医療の質・安全学会学術集会でも医療倫理と医療安全の単位認定としてのセッションが設けられている。今回第14回の学術集会では、児玉安司氏（弁護士）と永井良三氏（自治医科大学）が座長を務めたシンポジウムの他、山本晴子氏（国立循環器病研究センター）によるセミナーも開催された。その内容も、臨床研究の入門的な内容から臨床研究法に関する極めて専門性の高い内容までカバーされ、医療倫理・研究倫理の分野においても最も有益なセッションが設けられたことは、特筆に値しよう。

今回の学術集会には、主催者発表で3300人を超える参加者を得た。昨年度は、やはり主催者発表で2600人以上が参加したとのことであり、今年は急激に参加者が増加した数字発表となっているが、参加した者として、この数字は決して大きすぎではなく、むしろ実際の参加者よりは少な目ではないかとの印象を持っている。恐らく主催者も把握できない程の当日参加があったのではないかと推測する。筆者は学術集会の2日間ほぼ終日各セッションに参加したが、どのセッションも非常に多くの立ち見参加者がいて、移動も多くの参加者と体をぶつけあつての学術集会であった。

来年度の次回第15回学術集会は、2020年11月22日（日）～23日（月・祝）に2年ぶりに幕張メッセで開催される予定である。次回もこれまで以上に有益な学術集会であることが期待される。